

現地研修「津久見史跡巡り」(二)

吉田勝重

(会員)

(二) 大友宗麟墓地公園

大友宗麟の墓は、現在、津久見市大字中田字ミウチにあり、平成五年に津久見市の指定史跡になっている。



大友宗麟公墓碑 (中田)

この墓碑には、正面に「瑞峯院殿前羽林次将兼左金吾休庵宗麟大居士」側面に「天正十五年丁亥年五月廿三日春秋

五十有八歳」「九州二島伊豫管領 従四位下兼佐近衛少将 大友左衛門督源義鎮」と刻まれている。

現在残るこの墓は、寛政年間(一七八九〜一八〇二)に、大友家旧家臣の子孫である臼杵城豊が、この地に改葬し墓碑を新調したと「豊後国臼杵城豊篤志行為文書」に書かれている。この墓石の側には昭和五十二年(一九七七)、元大分市長上田保氏等がキリシタン大名大友宗麟を記念してキリスト教式の墓石を建立した。この二つの墓石は後世に作られたものである。

大友宗麟は天正十五年(一五八七)五月二十三日に逝去した。その時の様子は「日本西教史」にくわしく書かれていると言う。

宗麟の臨終に立ち合ったのは、奥方のジュリア、二男のドンセバスチャン親家、娘で清田鑑忠の妻ジュスタ、伊東義賢に嫁いだレジンナ、久我氏に嫁いだ異教徒の娘、ジュリアとの間に生まれたモリカとルジンナの七名であった。葬儀は二日後にキリスト教により実施され埋葬された。埋葬された場所には一種の礼拝堂が建てられた。

この礼拝堂は太陽に対する掩(おおい)を意味するもので指物細工による非常に立派なものであった。周囲に柵

が巡らされ、キリシタンが祈りを捧げられるように建てられたものであった。その規模は一辺が畳二枚の長さの方形で、内部は約四畳の廣さで正面は見事な指物細工で作られ、上部に美しい浮彫りでイエズスの御名がみられ、アーチの片一方に「フランシスコ死す」と彫り、他方に逝去した年月日が彫られていたと。二男の親家が一基の美しい巨大な十字架を墓地近くに建立させたとある。(フロイス日本史豊後編より)

宗麟の死後、二十七日目に宣教師追放令が発せられ、百ヶ日の忌日に、この礼拝堂を壊し仏式の墓が建てられた。この仏式の墓にも上部を蔽う鞘堂さやどうがあったらしい。百ヶ日の法要は府内(大分)の大智寺で行われている。三男の親盛は、大友義統改易後に細川忠興に仕え、かつての家臣の軸丸うしなわと左衛門に、宗麟の墓の管理を頼んでいる。この文書は軸丸文書と言われ、大分県史料三十五巻に収録されている。

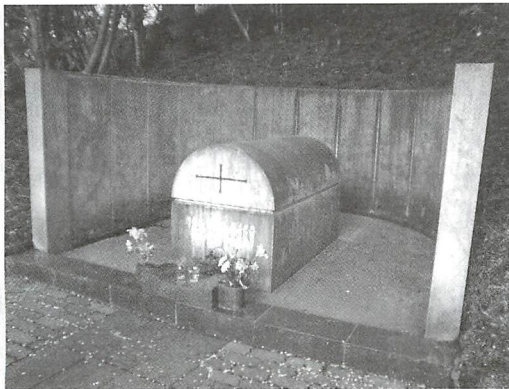
昔の宗麟の墓(廟所)が何処にあったかは明確でなく堂築、引地、則近、鍛冶屋など諸説がある。

解脱閣寺年代記に「天正九年(一五八一)天徳寺に隱居する。」文化三年(一八〇六)報告の大庄屋西郷右衛門の

郷村明細帳に「一、大友の御墓所ヶケ所、但し天徳寺御林の内、縦九間、横六間、中田」「一、寺無御座候」が大友宗麟関係の文書として残されている。

この天徳寺がどこにあったか不明である。

慶長十九年(一六一四)二月宗麟の墓堂が焼けたという記録がある。



上田保氏等が建立したイタリアの大
大理石で作られた大友宗麟の墓石

佐伯市上城の天徳寺は津久見の天徳寺が移転されたものとも言われている。

天徳寺の境内には大友宗麟の墓と呼ばれる無縫塔がある。しかし、天徳寺は数度の火災に遭っており当時の記録等は残されていない。

吉岡妙林尼の墓所

大友宗麟公園の一角には、豊後のジャンヌダルクと呼ばれる妙林尼みょうりんたの墓ががある。



吉岡妙林尼の墓

大友宗麟公園の入口右手に、吉岡妙林尼の墓がある。

吉岡氏は、高田荘（鶴崎〜高田にかけての大野川流域、萩原、牧、横尾、猪野、大分市）の領域を治めていた大友氏の重臣（加判衆かばん）である。吉岡氏は宗徹そうてつの時、千歳の丘陵地に築城し鶴崎に館を構えた。

妙林尼は、天正六年（一五七八）島津軍との日向高城合戦で戦死した吉岡鑑興あきむねの妻で菩提を弔うため妙林尼と号した。

天正十四年（一五八六）薩摩の島津軍が豊後に侵攻し府内の町は焼き討ちにあい占拠された。

この年の十二月、島津軍の伊集院久宣、野村文綱、白濱重政等が三千の兵で攻め込んできた。子の吉岡甚吉統増は、大友宗麟とともに臼杵丹生城（現臼杵城）に籠城していた。

島津軍の侵攻に対し、鶴崎城に籠もった妙林尼は、十六次にわたる島津軍の攻撃を跳ね返した。兵糧が無くなり掛けた頃、全員の命を保証するという条件で和睦。鶴崎城を明け渡し島津軍に降った。

翌天正十五年（一五八七）、豊臣秀吉の九州侵攻（島津討伐）の情報がいると、島津軍を招き鶴崎とのお別れ会をし、あとで薩摩に行くこと約す。

三月八日早朝、鶴崎城を立つ島津軍を寺司川原（乙津川原）にて攻撃、島津軍を打ち破った。この時、伊集院、白濱両将は戦死、多くの島津軍が死傷した。

のち宗麟のもとに身を寄せたため墓が宗麟墓地にあるという。また、この大友公園や周辺の高台には、大友宗麟の家来と呼ばれる人々のお墓が祀られている。



大友家の家来の墓と呼ばれる墓

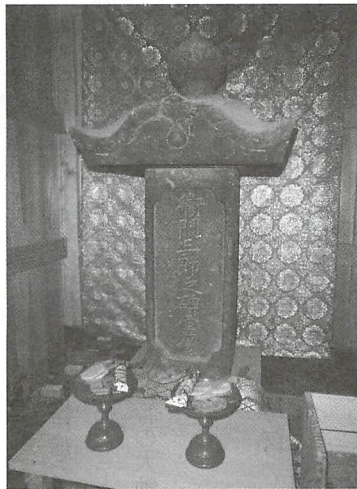
(三) 衛門三郎之碑靈儀

津久見市鍛冶屋より田尾に至る道路沿いの墓地内にある。正面には「衛門三郎碑靈儀」と書かれている。側面には、「文化十年酉天二月乏之者也」とある。

文化十年は今から二百年前にあたり、文化八、九年の百姓一揆は有名である。それと前後して作られたもので、衛門三郎碑靈儀の説明には、「この碑は、文化八年に建立され

たもので、菩提寺より分霊、授与を受けて靈儀として祀るのが始まりと書かれている。参詣する時は茶を持って参りお供えするようになった。八月十八日は衛門三郎の縁日で供養盆踊りが盛大に行われる。

この衛門三郎之靈儀は津久見市内に三カ所、西の内のトイグチ、海岸寺、千怒広浦にある。



衛門三郎之靈儀

夕映え会誌には、「この地に行者あり。ある日鯛の骨をのどに立てて死んだ。死の際に『我を信じ祈るならば首よりの上の病氣は治してしんぜよう。』と言って茶を一口飲んで息を引き取った。」との説明がある。

当時は、行者が巡礼途中で亡くなったら、衛門三郎(巡

礼を始めた人」と名付けて埋葬した」と書かれていた。

衛門三郎伝説には、衛門三郎は四国遍路を始めた人であると伝えられている。

伝説のあらすじは以下のようである。

「昔伊豫の国、浮穴郡荏原に衛門三郎という強欲非道で神をないがしろにし佛を嫌う長者がいました。

ある日、みすばらしい托鉢の僧が鈴を鳴らし、何度も来るので鉢を取りあげ投げつけた所、八つに割れました。翌日から衛門三郎の八人の息子達が次々に死にました。

ある日、弘法大師が夢枕に現れ、今までしてきたことを悔い改めるように諭しました。衛門三郎は先日の托鉢の僧が弘法大師と気づき、邪心を捨て改心し、弘法大師を探して詫びるために四国の寺を次々に廻り巡拝しました。弘法大師に会えぬまま、天長八年（八三一）四国巡礼を何度もし、遂に阿波国の焼山寺の前で倒れてしまいます。その時、突然、弘法大師が枕元に現れ、罪が消えたことを伝え最後の望みを聞きます。

衛門三郎は、生まれ故郷を治めている河野家に生まれ、人のために尽くしたいと話し事切れてしまいます。

弘法大師は一寸八尺の石に『衛門三郎』と書き、衛門三郎の手に握らせませす。その後、伊豫の豪族河野息利に石を握った男の子（息方）が生まれました。この石を安養寺に納め、寺号を石手寺と改めました。

熊野山石手寺は神亀五年（七二八）に伊豫の太守、越智玉純が熊野権現を祀り、勅願所と定めたことから始まった寺です。のちに四国霊場五十一番の大師信仰の中心の寺になっています。

なお河野家と越智家は同族である。

衛門三郎之碑靈儀の手前には『大白龍神之塔』と呼ばれる石像や『見ざる、言わざる、聞かざる』の三猿の像が見られた。また、周辺には数多くの江戸時代の年号を彫った墓石が二十数基あり、この周辺に庵が建てられていたと推測できる。

私たちは「衛門三郎之靈儀」から四番目の訪問地である「放光山解脱閣寺」に向かった。

(四) 放光山解脱閣寺



臨濟宗妙心寺派：放光山解脱閣寺

解脱閣寺は応安七年(二三七四)年、南溪宗禪師が開いた。南溪宗禪師については「豊鐘善鳴録」には「国東の人、幼少の頃宝陀寺(大田村)に入って僧になった」とある。また、この寺の「放光山解脱閣寺記」には「何国の産か、

何姓の人か知らず」とあり、寺社考には「田原某末子也、国東郡定林院住職なり」とある。

「解脱閣寺由来記」には次のように書かれている。

放光山解脱閣寺記

佛豆之後卅海都那約杵壘城南津久見
 邑放光山解脱閣寺者南溪宗和尚取
 南創也屢罹厄廢無回記念祀土人碑
 相傳知无師不知何國之産何姓氏家
 挂錫於徑山精勤得法自誓日歸梓劍
 建梵宇得似徑山聖境之勝飽着期乎自
 白徑山堂頭和尚難考以合之扁題夫醉
 脱境也背山而海風景瀟灑增人道氣
 信為梵宮佛宇之所宜托也徑山境内有園
 漢解脫亦以園呼漢師加園之二字為四字
 辨手翦耒一軸書寫法華經全部置焉
東行 同三十三

放光山解脱閣寺記

豊之後州海都郡、白
 杵亀城ノ南、津久見
 邑放光山解脱閣寺ハ
 南溪宗和尚開創ノ所
 也屢罹厄廢ス。旧
 記ニ無ク土人口碑ニ
 托令、相傳ハ左ノ如
 シ、師何國之産何姓
 氏力知ラズ曾宋ニ入
 ル。徑山於イテ挂錫
 ス。精勤シテ法ヲ得

ル。自誓日歸シ、梓り梵宇創建スルヲ得、徑山聖境之勝絶ニ似スヲ為ス。期乎回白、徑山堂頭、和尚難考道称付シ、以テ扁題ニ之ヲ令ム。夫解脱ノ境也。背山面海、風景瀟灑、人道増シ氣信ヲ為ス。梵宮佛宇之所宜托也。徑山境内閣溪有り。解脱亦以閣ト呼、漢師閣之一字ヲ加、四字ト為シ號

乎。齋さいらい一軸、法華經全部書寫ス。豎五寸圍三寸。衡斜こうしゃ點てん書が勻いん共、空中之雨整せいフガ如ク、上瀨之魚實うじん為なスニ似ル。奇物前龜城主越智おち信通英君盛寶ほうかん函秘重辱染翰せんかんヲ以テ山林田園等寄附ス。丁月桂けい五世古峯大和尚隱栖いんし之月、師一日忽きつ忙ぼう、一庭ニ於テ洒水、衆大二驚おどろキ問答ス。曰宋國徑山鬱うつ攸けい之災有あリ汝等戮りくり力嗣よくけい后、徑山ニ除災之謝贈せんおル、書附以鉞はつ一對令ム。現在矣池有あリ、默咒呼もくじゆ、泉蛙せんあ声喧けんろ昭しやう。師頌作しゆり水ニ投ズ、群蛙總ぐんわジテ唾つばシ雷神らいじん威いニ伏ス。曰ク

共術斜點こうしゃてん盤ばん自如空中之雨整せい似上瀨之魚實うじん爲なスニ似ル。奇物前龜城主越智おち信通英君盛寶ほうかん函秘重辱染翰せんかんヲ以テ山林田園等寄附ス。丁月桂けい五世古峯大和尚隱栖いんし之月、師一日忽きつ忙ぼう、一庭ニ於テ洒水、衆大二驚おどろキ問答ス。曰宋國徑山鬱うつ攸けい之災有あリ汝等戮りくり力嗣よくけい后、徑山ニ除災之謝贈せんおル、書附以鉞はつ一對令ム。現在矣池有あリ、默咒呼もくじゆ、泉蛙せんあ声喧けんろ昭しやう。師頌作しゆり水ニ投ズ、群蛙總ぐんわジテ唾つばシ雷神らいじん威いニ伏ス。曰ク

報恩ほうおん永鎮えいぢん一物ヲ為なサント云フ、師許サズ、再三これ焉なヲ請こウ、師云ク此山水乏シ汝力能乎あたうか、雷神らいじん應おこ諾たス、師卓錫たくしやく一下声応こシ清泉沸騰ふいとうシ今ニ至ル。混々然タル天女未參ス、有年信しんヲ表あらわス天衣てんいヲ獻けんズ。去ル天文年中兵紛へいぶんの為失あス、現有天衣松てんいそうハ師手石

延享四龍集丁卯七月解制月
日州天壽山陰骨清堂主八十一翁古月

上載一株柏樹かしわ不托根たか於土中ちちゆう二於テ托サズ、偃蹇えんけん蓋鬱がいよく然ノ如ク觀可、或ハ云柱杖樹ちゆうじやくじゆト。海邊泣石うみべのなみいし有あリ、師二隨したがヒ渡海之船ふみのふねニテ来ル。着岸之日惜別しやくべつ悲泣ひなみ止ラズ、故二南溪なんせき泣石ト号ス、其形怪異也。師戰化實十月六日也、曆號支干記七

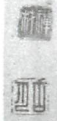
上載一株柏樹かしわ不托根たか於土中ちちゆう二於テ托サズ、偃蹇えんけん蓋鬱がいよく然ノ如ク觀可、或ハ云柱杖樹ちゆうじやくじゆト。海邊泣石うみべのなみいし有あリ、師二隨したがヒ渡海之船ふみのふねニテ来ル。着岸之日惜別しやくべつ悲泣ひなみ止ラズ、故二南溪なんせき泣石ト号ス、其形怪異也。師戰化實十月六日也、曆號支干記七

ズ。今ニ至ル凡三百五十年餘乎。伏以南溪なんせき和尚おしょう夙しよニ願ねがヒリ穀こく未ま化風かま普ふキ、龍天りゆうてんニ擁護ようごサレ、上ハ祝いのち聖せい躬こうを祝、下ハ黎庶れいじよニ福ふくシ、大饒じやうえき益えきニ非なズ哉、茲いまハ現住持宗田そうでん首座しゆざ止錫しやく、天壽山てんじゆざん時とき扣骨こつこつ清堂せいどう日ひ袖しゆ髻けい巧くわう記き放光ほうくわう之顛てん末ま不顧ふこ不文ふぶん昭あき口碑くひ緝録しやくろく、希まれウ後人大手筆あしなヲ採まルヲ俟

禪林

古月

雙祥村欽記



日州天壽山陰骨清堂主八十一翁古月
延享四龍集丁卯七月解制月

この「解脱閻寺記」の内容を要約すると、

「豊後の国海部郡臼杵津久見村にある放光山解脱閻寺げだつあんじは南溪和尚なんけいが開いたものである。解脱閻寺は災いに遭い廃された。記録もなく土地の人の言伝えが残されている。

それによると、この南溪和尚は何国の出身で何という姓かはわからない。かつて中国五山の一つ径山けいざんで仏教の修行し奥義を会得した。修行を終え帰国したら故里ふるさとの地に寺を建てようと考えていた。帰国後径山に似た地を得、寺を創建した。その地はすばらしい景色の良い所で径山に似ている。径山の和尚『難孝道称』の言葉を寺の扁題としていた。それは解脱の境地を表している。寺の背に山があり海に面した景色のすばらしい所である。人が多く気が満ち、寺院を建てた場は神のお告げの場であった。径山の境内に閻溪あんにけいという場所がある。この解脱庵げだつあん（閻）にも溪谷がある。南溪師は閻の字を一字加えて解脱閻寺と号した。法華経全部を写した豎五寸周り三寸の軸がもたらされた。その文字は平らかさ、払点面の整いは空中から降る雨の如くで上瀬の魚に似て珍しい物である。

前の臼杵城の城主越智信通おちは英君である。解脱寺には山林田畑を寄進したという文書が貴重な宝として残され

ている。五世住職宗順（古峯）和尚が隠棲の時の事であった。南溪師がある日ほんやりしていて庭に水を撒くことを忘れていた。宗徒が驚き師に問うと『宋の国の径山に憂いがある。汝等の力を貸して欲しい。』後で径山に手紙と一対の鉞はつを送る。境内に池あり。呪を唱えるが泉の蛙が騒ぐ。師が仏徳を讃える詩を池に投げると群がって鳴いていた蛙も静まりかえった。雷神もその威厳に打たれ佛の恩に報いる為何か一物を鎮めたいと言うが師は許さない。再三願うがなかなか許されない。その時師が『この山には水が乏しい汝の力で何とかなるか』と、雷神応諾する。師が卓杖を振り下ろすとその声に答えて清泉が湧き今も懇々と水が湧き出している。ある年天女が信心の証として天衣を奉納したが天文年間に兵火にあい無くなった。今ある天衣の松は師が自ずから石の上に植えた柏の木である。土中に根を生せず天に蓋をするように鬱蒼うっそうと繁っている。この木の事を拄杖樹とも言う。

海辺に泣き石ある。師に随い海を渡って来た。別れを惜しみ泣き止まる事がなかった。この石を『南溪泣き石』と言う。師は十月六日に亡くなった。何年に亡くなったか暦号、年号、干支は不明。三百五十年余り前の事である。

南溪和尚死後、龍天に擁護され天子もつつがなく、万民にも福が満ち願いもかなえられた。金銭や物品が豊になったのではないだろうか。この解脫閣寺記は現在の住職である宗田首座が天寿山扣骨清堂に籠もり放光山解脫閣寺の記録・顛末として記した物である。人々の言い伝えをまとめた物である。願わくば後の人が筆を取り記録していつてほしい。その事を期待する。

延享四年七月天寿山陰骨清堂主 八十一歳 古月翁
禅林謹んで記す。」

このように書かれている。

この寺記に似たものが、大分県寺社名勝図の中にも略記として紹介されている。この解脫閣寺記は天正年間に大友氏のキリスト教への宗旨替に伴う「寺社打ち壊し」「焼討」等により焼失したと言う。それ以後の歴史を語る古文書が残されている。

最後に、その一部を紹介する。

《古文書一・正保四年解脫閣寺古文書》

解脫閣寺之屋敷

高為寺地之山分付置之者也

稲葉能登守

正保四年三月十三日 花押

放光山當住古峯和尚

《古文書一・文禄式年閏九月十三日解脫閣寺差出之事》

解脫寺領差出之事

津久見村

合 田地 壹町五段大 畠地 八段大

屋敷一ヶ所

右知行無相違寺納候 若一粒一錢於虚言者

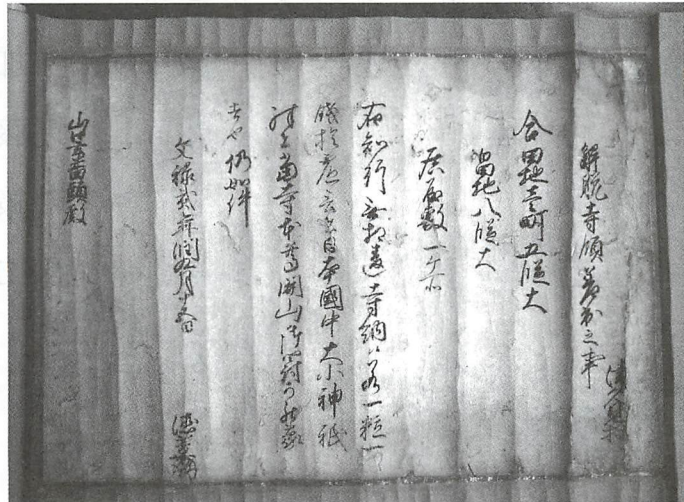
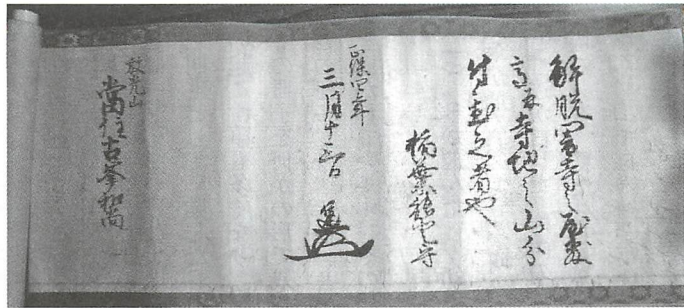
日本國大小神祇殊者當寺本尊開山御罰可罷

蒙者也仍如件

文禄貳年閏九月十五日 德芳(花押)

山口玄蕃頭殿

三月十三日 花押



(参考資料)

豊鐘善鳴録 II 二豊唯一の仏教人名辞書

二豊関係の著名な僧侶を宗派別に掲げ、その伝記、語録を記したもの。全十巻。一〜五巻は伝記、六巻から十巻まで語録。

著者は玖珠郡森城下、安楽寺(曹洞宗)僧、密雲俗名、河野彦契、速見郡野田村生まれという。昭和八年直入史談会より復刻
延享元年(一七四四)の序文あり。